

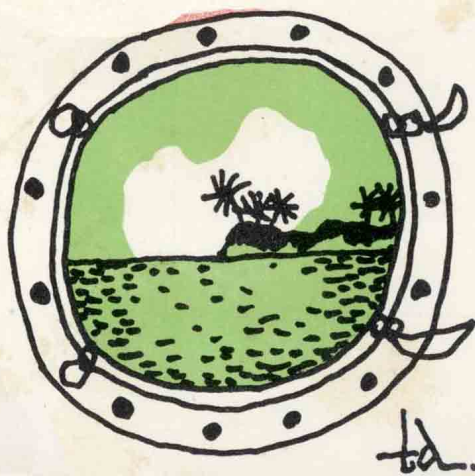
森村 桂

Lサイズでいいこう

レサイズでいこう

森村 桂

講談社



<同じ著者によって>

お嫁にいくなら (講談社刊)

友だちならば (講談社刊)

ビジュとシコメ (講談社刊)

お隣りさんお静かに (講談社刊)

青春がくる (講談社刊)

おいで、初恋 (講談社刊)

ふたりは二人 (講談社刊)

結婚志願 (講談社刊)

チャンスがあれば (講談社刊)

違っているかしら (オリオン社刊)

天国にいちばん近い島 (学研刊)

Lサイズでいこう

1968年8月24日 第1刷発行

1971年10月4日 第12刷発行

著 者 森村 桂

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (945) 1111 (大代表)

振替 東京 3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 320円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1968

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0095-122533-2253 (0) (文1)

Ｌサイズでいこう 目次

〈Ｌサイズでいこう〉

夢・ファイト・誠意

11

若者よ、立ち上れ

14

若者に集団訓練を強制せよ

23

明日の青春

29

拝啓 全学連トノ

32

若者よ冒険をしよう

33

「今の若い者は……」

39

人の心を打て

あまえちゃいけない

気の毒だが君は男だ

やさしく誠実ならば

し判の思想宣言

人を信じる

子供を叱ろう

年寄りを叱る

美しきババ抜きのパパ

ハネムーン

太陽のある暮し

79 74 68 67 62 61 51 49 48 44 42

〈音楽はきらい〉

音楽はきらい

85

こがね虫は金持だ

88

読書がきらい

90

まんが家バンザイ

92

映画よ誠意がないぞ

93

髪を洗う

95

おふろが好き

98

設計きちがい

100

椅子に坐る

103

船が好き

105

旅は気まかせ

108

〈ふろ桶一杯の杏〉

洋食はいかが

ああ、みそ汁

お料理学校何してる

味に個性を出せ

家庭の味

胃が喜べば

ふろ桶一杯の杏

ドーナツ型のお鍋

なつかしい天火

お菓子を焼く

私は食いしん坊

145 142 139 136 133 130 128 125 122 118 115

〈包帯をしたゾウさん〉

包帯をしたゾウさん

星のついた白い手袋

ミシンがきれい

私の作ったおひなさま

鯉のぼり

ヤシの葉の帽子

花が主役

白い貝のネックレス

土人のホステス

〈お父さんは旅行中〉

天狗の妹

女が海外旅行に発つとき

正直であれ

忘れられぬあのころ

ふるさとのお正月

お父さんは旅行中

〈与論、徳之島の旅〉

青春をぶつけた与論島

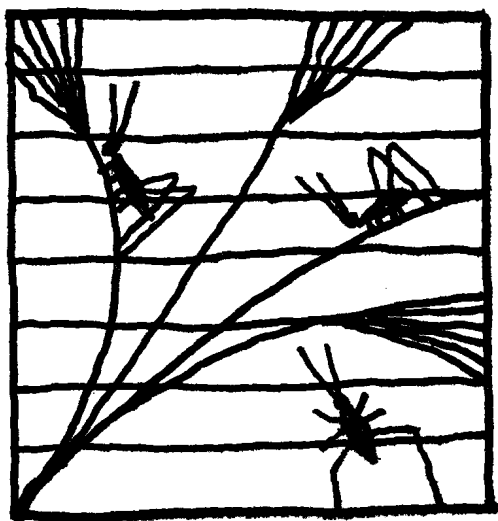
風葬のあと残る徳之島

あとがき

233 216 197 192 190 188 187 181 177

L
サイズで
いこう

Lサイズでいこう



-td.

夢・ファイト・誠意

私は兄貴が大きらいだ。ポーナスが入ればハンドバッグを買ってくれるし、時々シナ料理をごちそうしてくれるけど、それくらいじゃ消えない憎しみが、心の底からポッコポッコとわきあがっている。

「お前はブスいなあ」

これが実の兄貴が、私が青春期をむかえるようになったころ、毎日のように言っていた言葉である。その時、妹がどんなに絶望のどん底におちいったか、彼には分っちゃいない。私はそれでもかすかに望みをたくし、友だちの姉さんや知っているおばさんをつかまえて、

「ねえ、私、不美人？」

て、小さな声で聞いたもんだ。そしたらみんなきまってやさしくいった。

「桂ちゃん、人間は器量じゃないわ、心よ」

そして、私はもっともっと傷ついたのである。人間は平等だなんて誰がいった。そんなことがあるもんか、学校では頭のいいスミちゃんがいつも優等生で先生にほめられてたのに、私がいくらがんばって優等生になりたいと思っても、先生は私をよび出していった。

「森村さん、がんばらないと落第しますよ」

金持じゃないということも、絶対不平等だ。私はフランス人形がほしくてほしくてたまらなかつたのに、十五円のおつれたキュービー一つでがまんしなければならなかつた。

美人じゃないというのは、年ごろになつて致命的だ。よっぽど意地が悪い人でない限り、美人の方が断然モテルんだ。すてきな男の学生から手紙がきて、ホクホク開けてみたら、

「この手紙、どうかあなたの親友のミヨ子さんに渡して下さい」

なんて書いてあつた時の気持、美人の人なんかに分るもんか。何が平等だ、士農工商とかいう時代ならあきらめもつく。民主主義でこうだから頭にくる。いいいいよ、お前がその気なら、私じゃプールにとびこむか、ヤクザの女親分になつて、美人とみたらバッシバッシとなぎたおしてやるよといったけれど、そう思わなかつたのが教養の力か、器量より心よといわれた手前か。私じゃ発奮して、桂憲法をつくることにした。すなわち、

「頭がいいからいい学校へ入れる。コネがあるからいいところへ就職出来る。お金があるから外国へ行ける。美人だからモデル。こんなことがあつてもいいものか。人間は平等だ。夢、ファイト、誠意を持とう。これだけあつたら人間こわいものはない」

以上である。誰でも夢をもつ、外国へ行きたい、社長になりたい。しかし、大人になるとその夢はいつしか消えてしまう。お金のために、能力がないということのために。アホらしい、そんなことで負けてたまるか、ファイトをだせ、夢を持ったら、何が何でも突進するんだ、もしたら必ず道は開ける。開けたら、ありがとうと、頭を下げながらそれをつかむんだ。

私も夢を持った。いい出版社に就職したい、南の島へ行って暮したい。理想の人と結婚したい。

就職試験を受けたが、どこも落ちた。だけど、最後には、三ヶ月の試験期間を経て、目ざす出版社に入れた。南の島もそうだった。お金はなかったけど、私の心を受けとめてくれる船会社の社長さんがいた。島にはあたたかい住民がいた。

そして今、もっと幸せなことに、私の心をまるごと受けとめてくれる人にめぐりあった。その人は兄貴とちがつて、毎日こういつてくれる。

「君は美人だ、実にきれいだ」

そして私はほんとうに美人になった気持ちで、毎日ニコタニコタと暮している。もっともわがダンナさま、

「女ってのはね、美人だ美人だっていつてりゃあ、どんな不美人でもきれいになるんだよ」

なんて友だちにいつてたけど、そんなことはどうでもいい。わが同士よ、美人でなかうとう頭が悪かろうと、お金がなかうとうと、がっかりしちゃあいけない、夢、ファイト、誠意を持とう、そしたらみんな必ず幸せになれる。

（朝日新聞・一九六七年七月二日）

若者よ、立ち上れ

ある高名な大臣が死んだとき、借金しか残らなかった、家の塀しか残らなかった、そんな昔話はある。そりゃその人はえらいさ、だけど神様じゃないんだ、希代の英雄じゃないんだ、血も涙もある生身の人間なんだ、それが夢をもち国のためにつくそうと思つて代議士になったんだ、それだけの話なんだ、何もかわいい奥さんや子供に食べたいものも食べさせず、ほしいものも買つてやれず、自分はただ国のために……。そんな悲壮がることはないじゃないか。したつてできないことをキリキリ要求する方がいけないんだ。

かまわないとも、一億や二億。とれるところからゴッソリとつときな、一回大臣やつたら一生遊んで暮せるほどがっばりとつときな、そうとも、惜しくなんかない、私たちのために働いてくれるんだ、それがわずかな給料で暮さなきゃならないこと自体が間違つてゐる。汚職がばれようと心配するな、私たちが守つてあげる。それよかもつと大事なことがあなたにはある。この日本のために、ドカッといひことをすることだ。

四年間、これだけあれば人間、何だつてできる。重身体障害者の病院を徹底的に造ることでもいい、十分な団地を造ることでもいい、無料の病院を造ることでもいい、脱税のウデを生か